鈴　岡　城　址

県道駄科大瀬木線拡幅改良工事に
先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書

1990年2月

長野県飯田市教育委員会
長野県飯田建設事務所

鈴　岡　城　址

県道駄科大瀬木線本線拡幅改良工事
に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書

1990年2月

長野県飯田市教育委員会
長野県飯田建設事務所

序

竜丘地区から上段伊賀良地区・市街地への大動脈、県道駄科大瀬木線の改良も難所の、鈴岡公園付近を残すだけとなりました。

今年度この残った部分が拡幅される事になり、地域住民の願望が達成され、地域発展の基礎ができあがるわけであります。

この道路は、中世小笠原氏の居城であった県史跡の鈴岡城址の外堀を縦断しており、今回の調査になりました。

飯田市で今迄に城址の発掘調査が行なわれたのは、北本城跡（座光寺）・飯田城跡・松尾城跡などがあります。通状の埋蔵文化財は地中にあるため、その存在すら不鮮明なものですが、城跡は古墳とともに地上においてその姿が認められる数少ない埋蔵文化財です。

目に見えている遺跡である城址も、その存在を知ることができても当時の姿や具体的な内容までは推測の域を出ないわけで、発掘調査の結果、私達の目前に姿を現わすわけです。

今回の調査はわずかでしたが、中世城址の研究に意味を持ったものであり、今後の方向付けができました。

おわりに、調査実施にあたって種々ご協力をいただいた関係者各位に心から感謝申し上げます。

1990年２月

飯田市教育委員会

委員長　福　島　　稔

例　　言

1．本書は、県道駄科大瀬木線拡幅改良工事に伴う、「鈴岡公園」の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は長野県飯田建設事務所からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3．調査は、工事予定区域を中心とする地形測量を5月に行ない、発掘調査は6月7日から行なった。

4．本書は、調査員全体で検討の上佐々木嘉和が執筆し、小林正春が訂正、加筆を行なった。

5．本書に掲載した図面は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序
例　言
目　次
Ⅰ　経　過
1．調査に至るまでの経過 …… 1
2．調査の経過 …… 1
3．調査組織 …… 3
Ⅱ　城址の環境
1．自然環境 …… 5
2．歴史環境 …… 5
Ⅲ　調　査
1．調査区周辺地形測量 …… 8
2．試掘調査 …… 8
Ⅳ　ま と め …… 8

挿図目次

挿図1　鈴岡城址及び周辺遺跡位置図 …… 2
挿図2　調査位置及び周辺地図 …… 4
挿図3　調査区周辺地形測量図及び試掘グリット位置 …… 7
挿図4　鈴岡城址図 …… 9

写真図版目次

図版1　調査前・調査区全景 …… 12
図版2　試掘グリット2・4 …… 13
図版3　調査風景 …… 14

Ⅰ 経　過

1．調査に至るまでの経過

近年飯田市においては、市内全域において均衡のとれた諸開発が除々に進行しつつあるといえる。また、近年急速に発達した車社会の中で道路整備は急務といえる状態である。そうした中で、飯田市西部の伊賀良地区と南部の竜丘地区は、様々な形で急速に発達し続けている地区である。この両者をつなぐ道路整備は、社会的要望のきわめて高いものであった。

その具体策として、県道駄科大瀬木線の整備計画があり、ここ数年来改修工事が実施されて来た。そうした中で、両地区を結ぶ路線上の最も狭くなった箇所が最終段階の工事区画として、平成元年度に工事実施されることとなった。

たまたま、その位置は、長野県史跡鈴岡城跡の最下段部分に当たり、文化財保護法上の保護処理を講ずる必要が生じた。

そのため、平成元年３月15日長野県教育委員会文化課と、飯田市教育委員会社会教育課担当職員が立ち会って、その保護策について協議を行ない、それに基づき県教育委員会から現地周辺の測量調査及び試掘調査を実施する旨の通知がなされた。

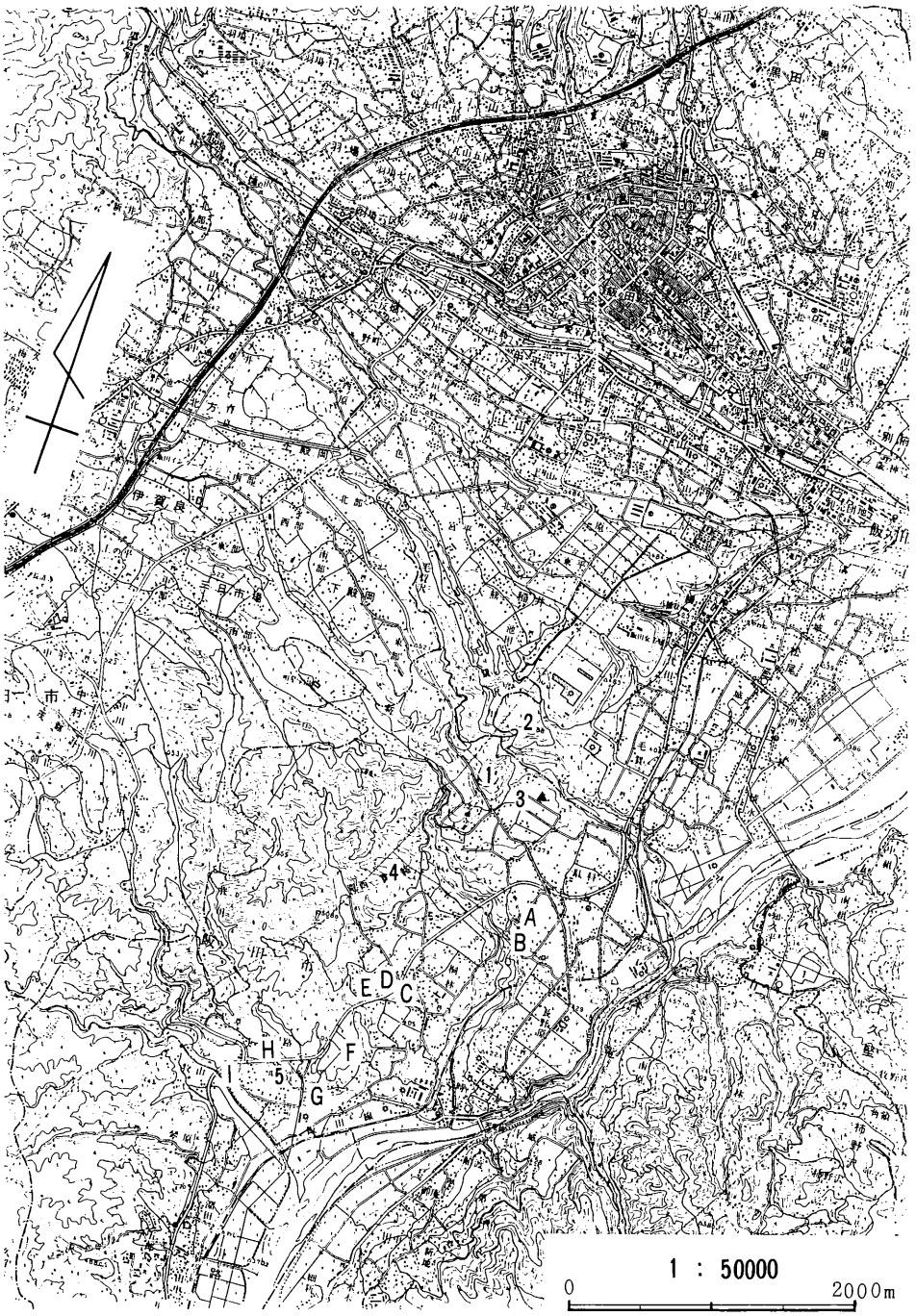
それにより、平成元年３月29日付で、長野県飯田建設事務所より埋蔵文化財発掘通知が提出され、それを受け飯田市教育委員会では、関連する諸手続きを行なった。

その後、年度が改まり、飯田建設事務所と飯田市教育委員会との間で諸協議を経て、平成元年４月22日付で現地での諸調査に関する委託契約を締結し、調査を実施することとなった。

2．調査の経過

関係者の諸協議に基づき、平成元年５月８日、地形、測量に着手し、空掘・土塁等の遺構確認作業を実施した。引き続き６月７日に道路拡幅部分の試掘調査を行なった。拡幅によって消滅する掘底の草刈りから着手した。堀は水田として利用されており、調査部分で４枚に分かれていた。試掘坑５箇所を、調査区両端との間に設定し調査を行なった。

現地での作業終了後、平成２年１月までに図面の整理を行ない報告書作成作業にあたった。



1.鈴岡城址 2.松尾城址 3.駄科北平(堂址▲) 4.前林廃寺址 5.開善寺古寺址

前方後円墳 A権現堂古墳 B塚越古墳 C丸山古墳 D大塚古墳 E兼清塚古墳
F塚原二子塚古墳 G金山二子塚古墳 H馬背塚古墳 I御猿堂古墳

挿図1 鈴岡城址及び周辺遺跡位置図

3．調査組織

(1) 調査団

調査担当者　小林　正春

調査員　　佐々木嘉和、佐合英治、吉川　豊、馬場保之、功力　司

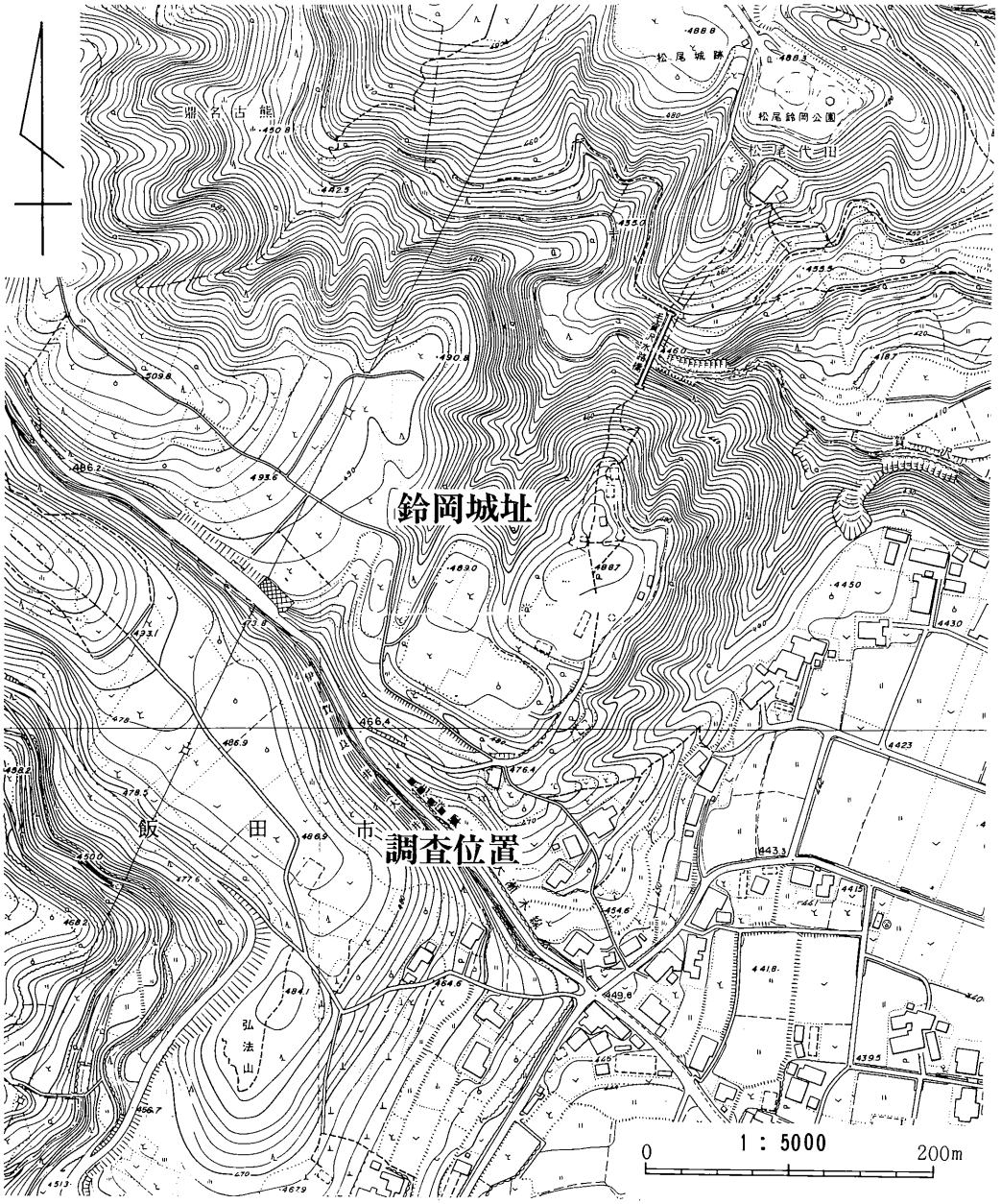
作業員　　木下　傳、木下当一、窪田多久三、高木義治、高橋寛治、高橋収二郎、中平隆雄
萩原和一、平沢今朝光、細田七郎、松下直市、松島卓夫、、森　　章

地形測量　　㈲ジャステックコンサルタンツ

(2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

竹村隆彦　（社会教育課長）
中井洋一　（社会教育課文化係長）
小林正春　（社会教育課文化係）
吉川　豊　（　　〃　　）
馬場保之　（　　〃　　）
功力　司　（　　〃　　）
土屋敏美　（　　〃　　）



挿図２　調査位置及び周辺地図

Ⅱ 城址の環境

1．自然環境

鈴岡城址は、飯田市竜丘駄科に所在する。

竜丘地区は飯田市街地から10～5㎞南にあり、北東は毛賀沢川を境に松尾・鼎、南西は久米川を境に川路、東南は天竜川を境に下久堅・竜江、北西は台地端で伊賀良に接している。

竜丘地区の地形を概観すると、西側半分は段丘崖を河川が侵蝕し、山地及び丘陵の形態を成している。東半分は数段の段丘面をいくつかの沢川が開鑿し、いくつかの小地域に分割されている。特にその中央部付近を新川が東流し、竜丘地区を2分している。新川の開鑿した谷は、段丘崖の部分が狭く、段丘面に出た所で急に広くなり、巾230～100m・深さ40～30mを測り、小盆地状を成して、時又地区において天竜川に合流している。

鈴岡城址は、伊賀良下殿岡の台地が東南方向にのびた段丘の先端に位置し、標高は約490mである。北東側に深さ60mにおよぶ気賀沢川の谷があり、南西側には深さ20mの伊賀良井（大井）の谷があり、その間の最大長500m最大巾200mのほぼ三角形の台地が城址である。北西側は緩やかなる傾斜で、伊賀良台地と同位へ高まる。南東側は、先述のとおり段丘端となり、駄科北平とは比高差約40mの段丘崖で区切られる。つまり、当該地は竜丘地区内における最高位にあり、地区内のいずれからも見上げる位置にあり、中世山城構築にあたっては最適の場所であるといえる。

2．歴史環境

竜丘地区には、数多くの歴史上の文化遺産が残存しており、中でも埋蔵文化財の包蔵地については、その種類・数ともに飯田市及び当地方全体を見ても、その代表とするにふさわしいものばかりである。

地区内において、埋蔵文化財包蔵地（以下遺跡）の発掘調査は、昭年42年度に国道151号の付替え工事に先立って実施されたのが最初である。その後、様々な開発に伴い10ヶ所程の遺跡発掘調査が実施され、そのいずれからも新しい歴史事実のいくつかが示されている。

それらの発掘調査の結果及び今までに様々な形で確認されてきた歴史事実の積み重ねにより、それぞれの時代時代において特筆されるものが多く、当市はもちろん当地方全体をみても、竜丘地区内で展開された歴史事象は当地の歴史そのものを示しているとしても過言でないほどである。

特に、地区内で存在の確認された130基を越す古墳は、全国的な視野で研究対象として位置づけられ、その内容の豊富さは言を待たないところである。

古墳の大量築造により示された特性は、次時代以降も様々な形で展開し、白鳳から奈良時代には、

大寺院を建立して政治・経済の結集した地域性を示し、南信の中核としての位置付を確立している。

後、平安時代における地域の動勢は不明な点が多いが、中世に至り、伊賀良庄地頭北条江馬氏により上川路の開禅寺の開基が知られ、さらに、本鈴岡城の築城と再び歴史の表舞台に登場してくるのである。

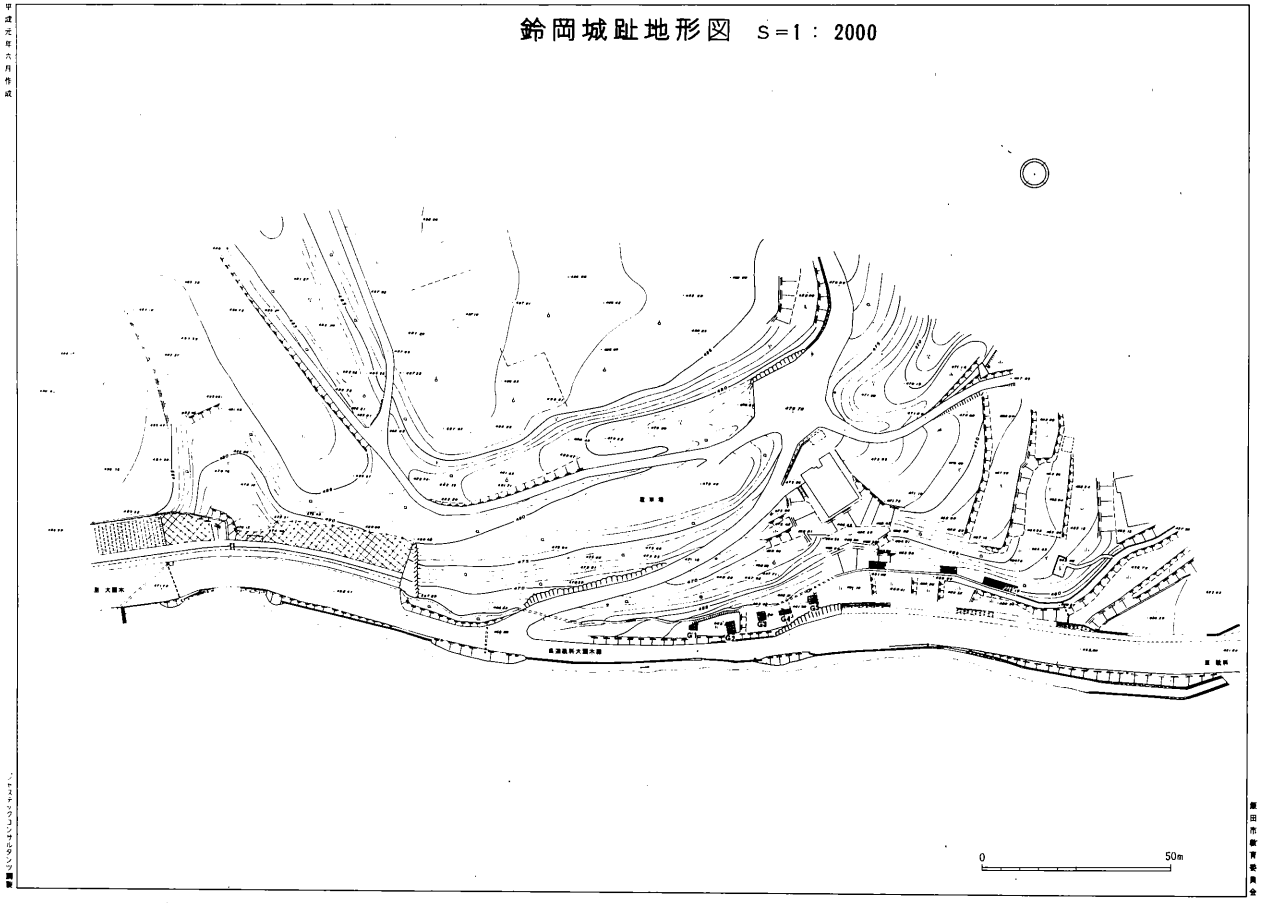
鈴岡城は、小笠原氏により、室町時代に構えられたとされ、気賀沢川をはさんで対峙する松尾城とともに地域を代表する中世山城である。

小笠原氏は、源氏系の名族と知られ、信濃国の守護に任ぜられたように、当地においてその権力は絶大なものがあったことがうかがえる。

しかし、戦国時代の動乱の中で、支配される側としての当地域の姿が、この小笠原一族の盛衰の中で具現する。

鈴岡城同様に松尾城も小笠原一族の居城であったわけであるが、その両者は、同族間において信濃守護職をめぐる覇権争奪の争いを演じ、双方の思惑も努力も水泡と化したばかりでなく、地域のそれ以後のあり方さえも決定づけたといえる。

以上のように、当鈴岡城跡が、当地方の今在るを知るに欠くことのできない重要な歴史資料であり、文化遺産であるといえる。



挿図３　調査区周辺地形測量図及び試堀グリット位置

Ⅲ 調　　査

1．調査区周辺地形測量

鈴岡城址の現状を把握する為、調査区周囲の測量を行ない、道路拡幅で消滅する部分の記録保存を計った。

この測量により二の丸・外郭・空堀りの一部が明確になり、現在駐車場になっている部分が、腰郭と確認された。また宅地となっている所は、竪堀と推測できる要素を持っている。

2．試掘調査

調査に先立ち１ｍ余にのびた雑草の刈り払いを行ない、道路拡幅の為消滅する堀底部分に、試掘坑５箇所を入れ遺構・遺物の確認を行なった。試掘坑には北西からＧ１～Ｇ５を付し、基本的に２×２ｍで設定した。Ｇ１は井水の関係で台形になり、Ｇ２は道路側ぎりぎりまで拡張した。Ｇ４は畦畔にかかったので１×３ｍに設定した。

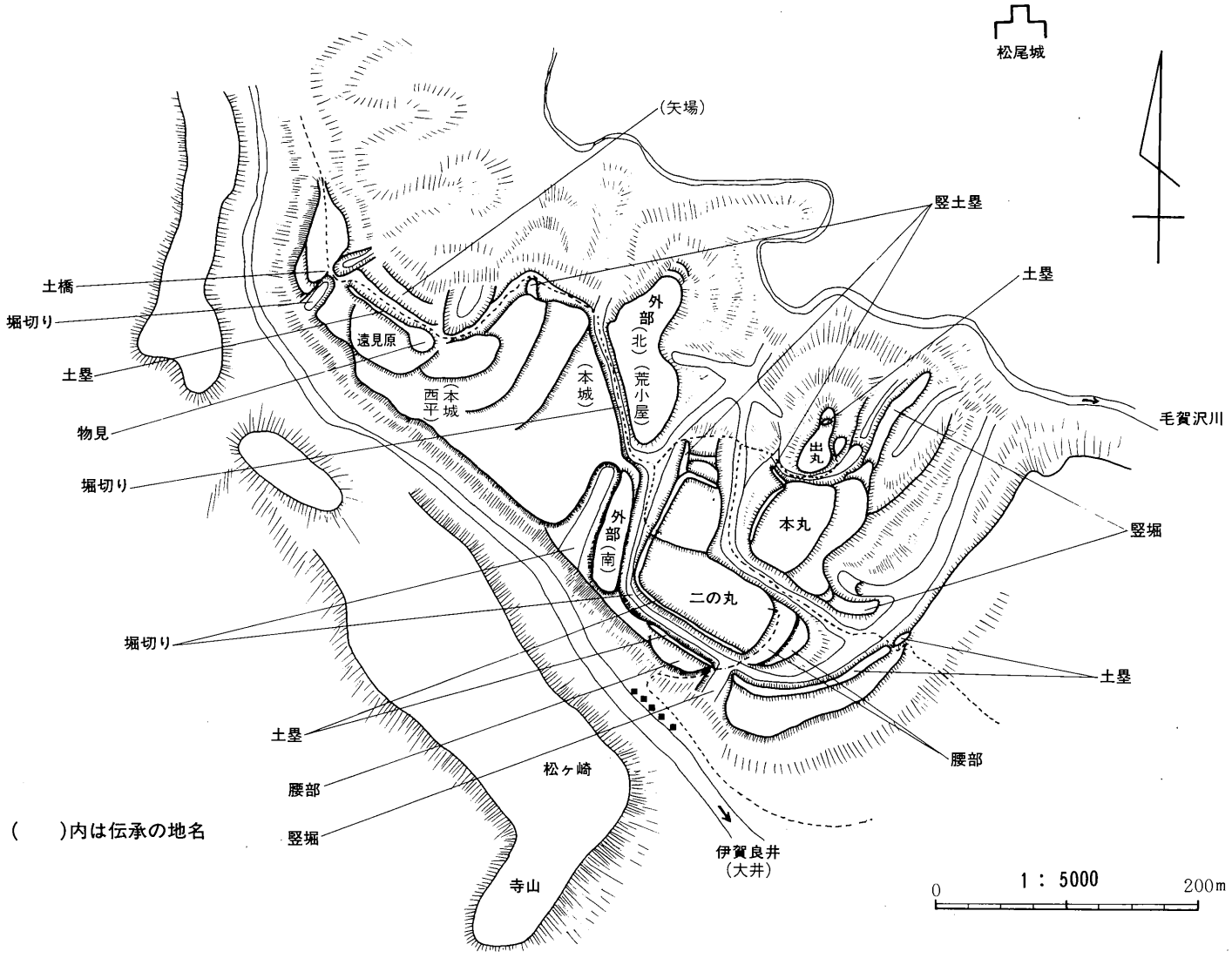
土層は全試掘坑ほぼ共通であった。地表から30～５㎝の水田耕土があり、耕土下は北半分城址側が基盤の花崗岩であり、南の伊賀良井側は花崗岩が急傾斜で下がり、砂礫層であった。

調査区は、城址の南端部自然地形により区切られた外堀的な意味を持つ最下段部分にあたり、遺物の出土が期待されたが、各試掘坑共に出土は無かった。

Ⅳ ま と め

県道拡幅工事にかかる、県史跡の鈴岡城址に関する最初の調査であった。

本城址の東南側下段の駄科北平遺跡では、昭和49年の発掘調査により堂址が発見されており、城址と一体で考察する必要がある地と判断され、城跡に関連する地域の広大であることを示唆した。今回の調査箇所は、端部とはいえ、城郭の一部に含まれ、先述の北平遺跡の例もあり、城に直結する諸資料の発見も考えられたわけであるが、結果としては、それを見い出すことはできなかった。しかし、地形測量の結果からは、縦堀の端部が当該地にまで至っていることの確認はでき、また、最下段の腰郭的な施設の存在も捉えられた。城郭最下段の施設といえる、今回の調査地点のあり方からその築城にあたり、その地形的な要素はくまなく活用する意図のあったことを示していると判


松尾城
(矢場)
竪土塁
土塁
土橋
堀切り
土塁
物見
堀切り
遠見原
西平
(本城)
(本城)
外部(北)
(荒小屋)
出丸
本丸
毛賀沢川
竪堀
外部(南)
二の丸
堀切り
土塁
土塁
腰部
竪堀
松ヶ崎
寺山
伊賀良井
(大井)
腰部
(　　)内は伝承の地名
0
1：5000
200m

挿図4　鈴岡城址図

断される。

さらに、調査結果から、その場所が城郭の中で具体的にどのような意味を持った地かの判断は困難な状況ではあるが、城郭全体の地形から、当地点を含む、南端部分のいずれかに主要な入口（追手）のあったことは、前述の北平遺跡一帯を城下町と考えざるを得ないこともあり、必然的に導かれることである。現県道敷下を含む、いずれかに当鈴岡城の最初の入口が存在したこともまた事実といえよう。

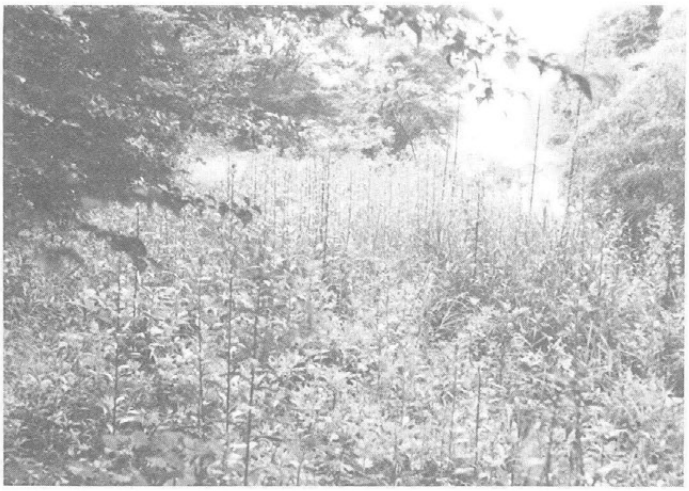
最後に鈴岡城跡については、その主要な郭部分を主体に、その歴史上の位置づけ及び、それぞれの諸施設の残存状態が良好であることなどから長野県の史跡に指定されているわけであるが、本格的な発掘調査を実施した経過もなく、基本的な内容については未解明な部分がほとんどであるといえ、今後における実態解明の期待は、計り知れないものがあるといえる。一方、同様な歴史経過の中に置かれ、同じく県史跡に指定されている、松尾城址が、無意な都市公園と化してしまっている現在、当鈴岡城跡の、歴史資料としての重要な意味を損なわない姿での活用を計るべく、関係者が深慮熟考の上、後世に伝える方途が望まれることを記してまとめとしたい。

＜参考文献＞

大沢和夫「鏡塚」　昭和42年10月飯田市教育委員会
大沢和夫・佐藤甦信「内山・花の木発掘調査報告書」　昭和43年　飯田市教育委員会
大沢和夫・佐藤甦信「安宅・大島」　1969　長野県飯田建設事務所
佐藤甦信「小池・宮城・神送塚」　1974　飯田市教育委員会
佐藤甦信「開善寺境内遺跡」　1974　飯田市教育委員会
飯田高校考古学研究クラブ「飯田市竜丘前の原遺跡調査報告」　1974　長野県考古学会誌17
佐藤甦信「前の原・塚原」　4975　飯田市教育委員会
佐藤甦信「駄科北平」　1975　飯田市教育委員会
市村咸人「下伊那史第２巻」　1955　下伊那誌編纂会
宮下　操「下伊那史第５巻」　1967　〃
宮下　操「下伊那史第６巻」　1970　〃
木下右治「竜丘村誌」　1968　竜丘村誌編纂委員会

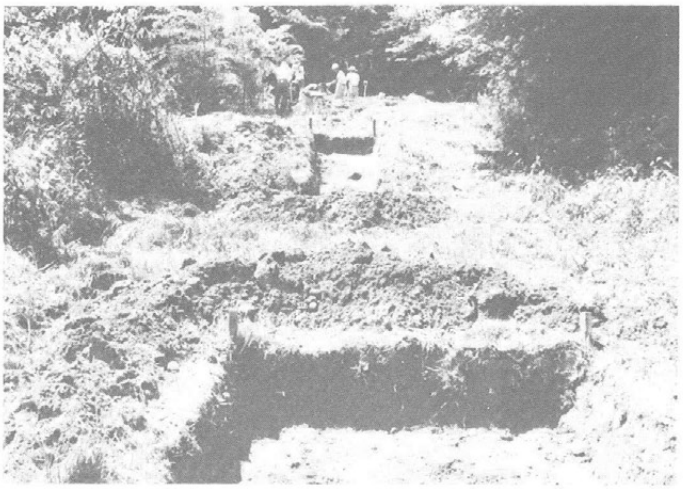
写 真 図 版

図版 1

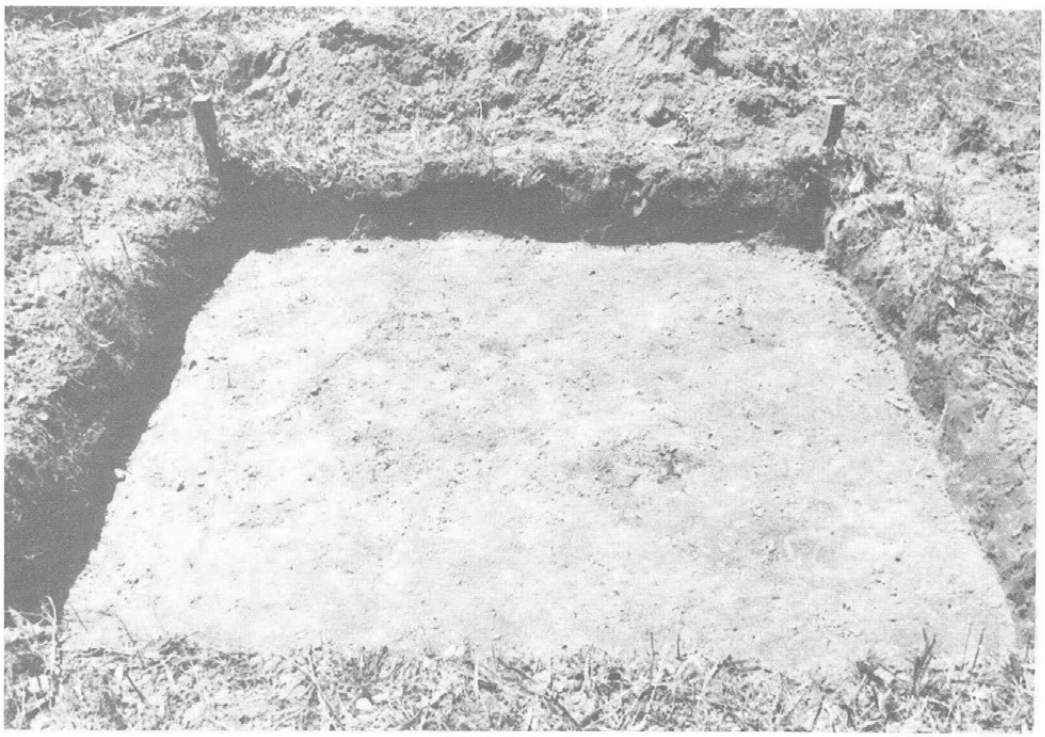


調査前
（北より）

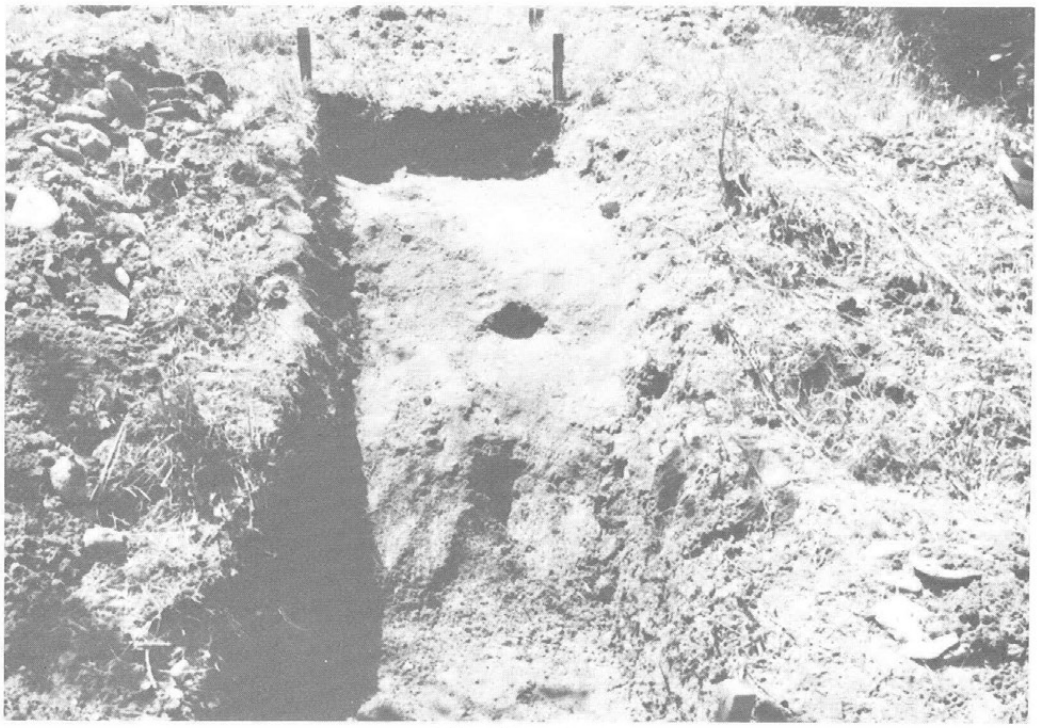
調査前
（南より）



調査区全景

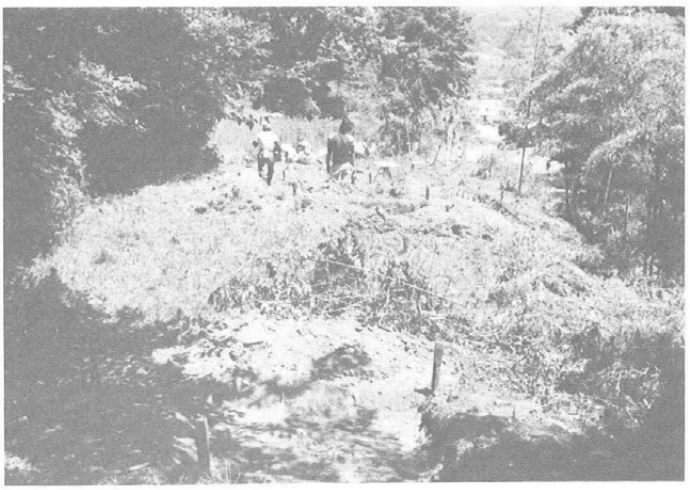


試掘グリット２



試掘グリット４

図版３



調査風景

県道駄科大瀬木線拡幅改良工事に先立
埋蔵文化財包蔵地緊急調査報告書

鈴 岡 城 跡

平成２年２月28日　発行
編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会
印　　刷　飯田共同印刷